並盛中同窓会　裏の幹事達

雪神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
並盛中同窓会　裏の幹事達

【Ｎコード】
Ｎ４３８５ＢＡ

【作者名】
雪神

【あらすじ】
ボンゴレ１０代目を正式に継承し、イタリアに住むツナ達に一通の手紙が来ます。中には、母からの手紙とはがきが一通入っていました。
それは同窓会の招待状、つかの間の休息を楽しみたいが行けないツナにリボーンがした行動とは！？
しかも、昔少し係わりのあるやくざが係わっているらしくて！？

プロローグ　一通の手紙

注意：ツナ達（雲雀・骸以外、骸は結構帰ってくるが）イタリア（ボンゴレ本部）に住んでいます
　　お母さん（奈々）はボンゴレのことを知っている設定で

　ツナは目の前の書類を相手に悪戦苦闘していた。ハンコを押しても押しても減らない書類の山をツナは「いっそ、燃やすか・・・」と、意識がないうちにぼっそとつぶやいた。そして、目の前の手紙を手に取った。
「あて先は・・・・・・くすっ」
ツナは笑いをこぼした。すると
「なにが面白いんだ？ダメツナが」
「リボーン・・・ダメツナはやめろよ」
ツナが仕事をしている隣で優雅に１００万ぐらいするティーカップでカプチーノを飲みながら言った。
「で、なんなだよ。その手紙は・・・！さっさと答えろよ！！」
といって愛銃を向け手紙を打った。しかし、ツナはひょいと手を動かし銃をよけた。
「・・・・・・・・・ちっ！」
「リボーンさーん、今舌打ちが聞こえたのは聞き流しておきますが、この手紙日本の母さんからだけど（黒笑）」
「・・・・・・！！内容は？」
リボーンが聞いた。すると
「さぁ？」
と言って、封筒を開いた。

――――――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――

ツー君へ
ツー君元気ですか？私は元気ですよ。くれぐれも死んではだめよ♪
無茶はしないでね。
本題に入ります。実はね同窓会のはがきが来たのよ。私が返すのはなんだからね、ツナ君が返して頂戴ね、よろしくお願いしますね。
たまには日本に帰ってきなさい、お父さんといいあなたといいたまにしか帰ってこないのだもの。帰ってくるときに電話してくれたらごちそう作って待ってます。

p. s　ツー君達がイタリアに住んでいるのは黙っておきました。怪しまれたらいけないからね。
それと、これは獄寺君達にも送ってあるからね

母より

「だってさ。」
とくすっと笑った。
「久しぶりにうれしそうな顔したな。」
と笑うリボーン。
「だけどな・・・」
顔をしかめるツナ。
「もう一枚のはがきが問題なんだよね。」
と笑うのだった。

初めまして、雪神と申します。このたび、初投稿でございます、以後お見知りおきを。

家庭教師ヒットマンの１０年後の世界の同窓会ネタを書くことになりました。
似た作品がありますがそこは許可を取ってあります。
けっこう、長編になりそうです、長々とご覧ください。
では失礼します。

はがきの内容

「なぜ、嘘の微笑みを浮かべる？」
リボーンが聞いた。
「ははっ、ばれました？さすがリボーン、営業スマイルになれちゃったみたい（黒笑）」
「それは、営業スマイルじゃないだろ？黒いオーラぷんぷんだぞ（黒笑）」
同じ黒笑でかえすリボーン、そして
「リボーンこそ。・・・・・はがきに書いてある日時がね・・・・・」
内容はこうだ

みなさん、どうお過ごしでしょう？
このたびは、並盛中の同窓会を開くことになりました。
日時は下のようになりました。参加できるかできないかを記録し送り返してください。

日時
1月15日（日）　11時から4時まで
場所
並盛桃巨ホテル　10階大広間

参加できる　　参加できない

幹事　黒川　花
　　笹川　京子

とのことだった。
「この日？会談なんだよね。たぶん罠だけど」
と悔しがっていた。
「へぇ～♪」
にやりと笑うリボーン。ツナは
「こいつなにかたくらん出やがる」
とひそかに思う。
「俺ちょっと出てくる。日が沈む前には戻る」
といって、部屋を出って言った。そのあとにリボーンと入れ替わりで入ってきた者達がいた。

はがきの内容（後書き）

第２話です。楽しんでもらえたでしょうか？
やけに、文が短いです・・・・。すみません。
頑張って書こうと思いますので、よろしくお願いします。

入ってきた人物

リボーンと入れ違いで入ってきた者たちがいた。
「ツナ！！」
「１０代目！！」
獄寺と山本だ。
「なに？同窓会のはがきなら来ているよ？」
と、言うツナ
「はは、はやいのな！情報が！！」
「で、どうします？」
獄寺が聞いた。
「行きたいんだけど・・・、その日会談があるんだよね、罠だと思うけど？？３日連続でさ」
ツナが笑いながら言う。すると山本が
「そうなのか？じゃあ、参加できないに丸を・・・」
自分の万年筆（１００万くらい）で丸を書こうとした。すると、獄寺が
「大丈夫です！１０代目！！どうせ、罠なら仕留めてきます！そのファミリーのボスを！！どうせ、小規模ファミリーです！弱いっすよ！！」
と、匣を出した。しかし
「いいよ、隼人」
ツナがその声を遮った。
「なぜですか？１０代目！！まさか俺が負けるとでも！！」
不審がる獄寺。その質問に答えるツナ
「いいや、ひとかけらさえ思っていないよ。でもね、お前が動くとどうなる？」
ツナが聞いた。すると
「一瞬でけりがつきます！！」

自慢げにいう獄寺、すると、万年筆が飛んできた。（山本のと、同じく１００万ぐらいするやつ）万年筆は、壁に食い込み壁にひびが入り、獄寺の服を壁に貼り付け動けないようにした。
「じゅ、じゅ、１０代目？こ、こ、こ、これ・・な、な、な、なんで・・・・す・・か？？」
怯えきった様子で言う獄寺。するとツナは
「見てわからない？ま・ん・ね・ん・ひ・つ、それが俺の気持ち？わかる？？」
極上の笑みで微笑むツナ、するといままで口を閉ざしていた山本が口を開いた
「ははっ！お前が動くと書類が多くなるだろ？ツナ、お前の気持ち？？」
「うん！！さすが武！鋭いね！！だけど、お前もだよ？？」
今度ははさみだ。やはり、山本も動けないようになる
ツナは極上のブラックスマイルを浮かべるとダーツを取り出した

ひゅん！！

風を切る音が聞こえ山本の頭の上に刺さり、２発目は獄寺の頭の上だ
「お前らが動くとさ請求書、書類、被害届がね、いつもの５倍ぐらいになるんだよ？」
山本と獄寺は只者と思えぬ殺気を感じ逃げようと匣を手に取ったが
「おっと、させないよ？開匣！！」
ツナがリングに火をともし、匣を開匣させ、ナッツを出した
「ナッツ、隼人と武の武器持ってきたら炎あげる、だからとってきて？」
「がぅ！！」
ナッツはあっという間に山本のリング、匣、時雨金時、獄寺のリング、匣、ダイナマイトを持ってきた

「いいこだ、はい」
ナッツにオレンジ色の炎をあげるとツナはナッツを元に戻した
「さて、続きをやろうか？（黒笑）」
ダーツを今度は連続で１０本なげ、獄寺と山本の体を完璧に動けないようにした
「さてと、聞いてもらいますか、僕の切実な話を」
といい、にんわり笑った。２人はもう失神しかけている
「君たちが大暴れした後誰が後処理してると思ってるの？僕だよ？？おかしくない？？？何もやってないのに、そのあとには請求書の山、おまけに、任務はランボに任せる。なのに、給料はちゃっかりもらってる。給料０にしてほしいの？？（以下略）・・・・・・あれ？？？？」
気づくと日は沈みかけており、山本と獄寺は気を失っていあた
「・・・・・・・・・ちっ」
小さな舌打ちが聞こえたのはスルーしておこう。ツナはランボを呼んだ。来てと連絡している途中でドアが乱暴に開いた。

入ってきた人物（後書き）

３話です！やけに長くなりました。
なんか、楽しかったです！！黒ツナかいてると面白いです。
楽しんでください、ではチャオチャオ～♪

リボーンの企み

荒々しくドアを開け入ってきたのはリボーンだった。
「おかえり！リボーン！！」
ツナが満面の笑みで言った。
「嗚呼・・・・・・・・！！！なんだこれ？？」
そういって、山本達を指差した。
「これ？えっとね、隼人があんまり調子に乗ってたもんでつい愚痴を聞かせたの。武もそんなもん」
にこにこ笑うツナ、顔を引きつらせるリボーン
「なぜ、はさみと万年ｈ「嗚呼、それは逃げようとしたから」・・・・・・」
リボーンは
（どんだけ、ストレス抱え込んでたんだ。疲れの色が消えてる・・・・。）
と、思った。そしてもう一つ
（山本、獄寺・・・・、ツナの怒りを買ったな。）
とすこし微笑んでたとか。

「で、会談の相手は始末してくれたの？」
書類を猛スピードで片づけながらツナが言う。
「嗚呼、やっぱり気づいていたのか。さすが俺の生徒」
「だから、隼人を行かせなかったんだよ。言っても無駄だから？」
「ははっ、そのことは獄寺に？」
「もちろん言ってないよ、ストレス解消の道具欲しかったから。」
といい、顔をあげ笑う。
（こいつの育て方いつ間違ったか？）
リボーンはふと思う。
「嗚呼、たぶん俺が切れて死ぬ気の零地点突破　初代エディション

で、雲雀さん凍らせたことあったじゃない？あれからだよ、きっと。」
ツナが心を読み質問の答えを返す。
「心を読むな、ダメツナが。」
「前半は昔の俺のセリフ。」
リボーンの銃弾をよけ、書類に目を通す。
「で、どうだった？」
話をもとに戻すツナ
「やっぱり、罠だったらしいぞ。これで、１４、１５、１６日は仕事はないぞ。」
「本当に！ありがとう！！リボーン！」
嬉しそうにお礼を言うツナ、ちょっと微笑むリボーン。
しかし、ここにはリボーンの暇つぶしの企みがあったのだ。ツナのクラスメートを驚かす企みがここにあった。
　そのあと、リボーンがいつものとうり、カプチーノを飲んで、ツナが書類に目を通していると
「ボンゴレ、来ましたよ。」
ランボの声が聞こえ戸が開いた。
「嗚呼、呼んでたんだった。あれよろしく。」
ツナは獄寺と山本を指差した。意識は戻っており、
「助けて～。」
とぼやいている。
「山本氏！！獄寺氏！」
急いで、２人をダーツから解放した。そして、真剣な表情になり口を開いた。
「大事なお話が――――！」
皆が耳を傾けた。

リボーンの企み（後書き）

第４話です。
けっこう長いかな？リボーンの企みが知りたい人がいるなら、メールを送ってください。
感想、評価待てます。チャオチャオ～♪

ランボの話

「大事なお話が」
ランボが前を向いていった。
「・・・・・・、どんな話？」
ツナが聞いた。
「あなた方が持っているそのはがきに関係のあることです。」
「・・・・・！！なんだと、アホ牛！」
「ランボ、何の話なのな？」
「同窓会に関係する？」
３人が聞いた。リボーンは黙っている。
「１０年前、あなた達が桃巨会っていう日本のやくざをボロボロに知ったて覚えてますか？」
「嗚呼、俺がディーノと一緒に企んでたやつか・・・。」
リボーンが口を開いた。
「あ！あのやくざか！！」
「そうみたいなのな！」
「・・・・・・（思い出したくない）」
ツナは苦い顔で思った。ランボは続ける。
「その桃巨会がですね・・・、あなた達に復讐すると、あなた達のことをかぎまわっていたらしいんですね。で、やっと所在を見つけたらあなた達はもういない。なんだって、此処にいますし。」
「で？それと同窓会と何が関係ある。」
ツナは問い、ランボは答える。
「あなた達のやる同窓会？並盛桃巨ホテルって書いてありますよね？」
「「「うん」」」
「そこが桃巨会の持っているホテルらしいのですよね。桃巨会はそ

のことを知ると京子さん宅に同窓会に沢田綱吉を来させないとあなたたちのクラスメートを襲うって手紙を送ったんですよね。脅迫状ですか？だから、フゥ太が同窓会を中止してくれと、京子さんに頼んだんですよ、そしたら「襲ってきたらツッ君困るよね、そしたら、ツッ君たち来るから同窓会は中止しない」の一点張りで。」
此処にいる全員が苦笑いした。
「ツナ～、モテルのな！！」
「武から言われたら、皮肉にしか聞こえないんだけど？」
ツナが山本をにらむ。
「しかも、同窓会の中に入れるのは同窓会メンバーだけだって。」
「それまた・・・。」
するとリボーンが
「結果的にお前たちは全員参加しないといけないらしいな。」
にやり、と笑いながらリボーンが言った。
「そうなるね、じゃあ、参加しないとね。」
ちょっと、嬉しそうにツナが笑った。

ランボから、壁に突き刺した万年筆をもらい、３人は参加するに丸を付け、使いを呼び
「これ、出しといて。」
と、３人のはがきを出した。

使いは忙しそうに部屋から出て行った。

ランボの話（後書き）

第５話楽しんでくれたでしょうか？
これかも、がんばって書きますよ～！！
それでは、チャオチャオ～♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4385ba/

並盛中同窓会　裏の幹事達

2012年1月14日12時53分発行